どんぐり

No.61

ひのき―ホルダーづくり（芦屋市立岩園小学校）

兵庫県立
南但馬自然学校
HYŌGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKŌ
(Nature Education Center)

南但馬から自然への招待状

兵庫県立南但馬自然学校
副校長　大西伸弘

本校機関誌「どんぐり」は発行を重ね、ここに第61号をお届けします。

創刊号より、表紙題字の横には本校シンボルマークの〝どんぐり〟が2つ描かれています。〝どんぐり〟と聞くと、何か懐かしく、ほのぼのとしたイメージが心に湧いてきます。〝どんぐり〟とは、カシやクヌギ・ナラなどの果実の総称であり、大きさや形も木の種類によって様々です。本校には、たくさんの〝どんぐり〟がなります。秋の深まりを感じる頃、風が吹くと、〝どんぐり〟が辺り一面に落ちてきます。森の中にある丸太置き場の屋根に当たると、パチパチパチと大きな音を立てます。木々は、となりの木より少しでも多く陽の光を浴びようと、上へ上へと枝を伸ばしており、その〝どんぐり〟は、相当高い所になっているのか、下からは見えません。アニメ「となりのトトロ」のように傘をさしてジャンプで地面を震わすと、雨の代わりに大量の〝どんぐり〟が降ってきそうな風情を楽しめる、そんな場所も本校にはあります。

ここに勤めて、初めて目にする物もありました。その一つ、〝森のエビフライ〟は、まつぼっくりがリスにかじられて、エビフライそっくりになったものです。見つけた場所を子どもたちに教えてあげると、「誰が作ったの？食べられるの？」と、質問攻めにあいました。そんな好奇心は、学習意欲につながります。自然学習では、まず五感で感じ、いろんな推測をしてみる。そして、不思議の答えを科学に求める。教えてもらうことも大切ですが、自発的・主体的に答えを導き出すことが大きな意味を持ちます。

本年度は、62校が本校で自然学校を実施されました。各校、工夫を凝らして特色ある体験学習を実施されていたと感じています。入念な事前準備のもとに、子どもたちが司会進行などの役割をしっかり行っている学校が多く見られたことを大変うれしく思います。ふれあい体験では、自校内の仲間づくりに意識がいきがちですが、他校との交流も貴重な学習の機会となっています。同一週の利用校が互いを紹介し合うことは、母校への誇りや住んでいる町への愛着と自信を育てる上で大きな効果を生むと考えます。学校間交流のためにはプログラムの企画段階から連携が必要ですが、各校が前向きに取り組まれ、この体験をその後の学習や生活に生かされることを期待します。

この1月に、副校長室から外を見た時、深々と雪が降り積もる幻想的な世界が広がっていました。子どもの頃、家の裏山できんま（＝木馬）遊びをしたのを思い出します。本校でも、そり遊びが楽しめそうな場所をいくつも見つけることができます。豊かな自然は、四季の移ろいを敏感に感じ取る力を育てると共に、心にゆとりを持たせ、柔軟な発想を生みます。本校では、この季節ならではの自然体験が可能で、動植物の不思議もたくさん発見できます。その魅力を体感していただこうと、「親子で自然学校」等の主催事業を実施していますので、ぜひ、冬の南但馬自然学校に足を運んでいただきたいものです。

最後になりましたが、今年度も本校を利用していただいた各学校が当初の目的を達成され、自然学校が無事終了しましたことに、深く感謝を申し上げます。

本校は来年度、開校20年を迎えます。子どもたちを教室から豊かな自然の中へいざない、自然学習や体験学習そして、集団生活の拠点となる自然学校をさらに充実・発展させ、心の教育や社会的自立の基礎を培う場となるよう、職員一同努めて参ります。今後とも、南但馬自然学校のご利用をよろしくお願いいたします。

平成 24 年度の兵庫県立南但馬自然学校での活動を振り返って

～子どもの成長に大切なこと～

兵庫県立南但馬自然学校
主任指導主事兼指導課長　北條　勝也

平成 24 年度の本校での自然学校実施校は、47 グループ 62 校であった。過去５年間の活動形態の推移と、昨年度との比較による野外炊事の回数から、今年度の特徴をまとめてみた。

表１　活動形態による割合　（%）

	活動形態	H 24	H 23	H 22	H 21	H 20
一斉	全員で同じ活動を行う	40.4	46.8	50.8	52.9	39.6
	同じ活動を班単位で行う	36.0	31.0	29.1	30.8	36.4
	同じ活動を個々に行う	22.1	20.7	15.9	11.8	19.2
選択	学級単位で選択して活動する	0.0	0.0	0.9	0.0	0.0
	班単位で選択して活動する	0.0	0.0	0.4	1.4	1.0
	個人単位で選択して活動する	1.5	1.5	2.8	3.1	3.8
合　計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

平成 20 年度は、自然学校の期間が５泊６日であったが、平成 21 年度からは実施期間の弾力化により４泊５日以上となった。実施期間が短縮されたことにより、比較的活動時間の見通しが利き、指導しやすい一斉指導の時間が増えたが、４泊５日の自然学校が定着して、表１のとおり、一斉での活動形態に変化が見られるようになった。

それらから、以下のねらいが考えられる。

① 「全員で同じ活動を行う」の減少　実行委員を中心とした子どもたちの意見を取り入れ、子どもたちのニーズに応じた活動形態を取り、子どもたちの意欲を高める。

② 「同じ活動を班単位で行う」の増加　自然学校のねらいを仲間づくりに重点を置き、友だちとの交流する機会を意図的に多くしたり、また、班やグループでの活動を多くすることで、協調性を高め、思いやりの心を育てたりする。

③ 「同じ活動を個々に行う」の増加　一人一人を大切にし、一人で各活動をやりきることで、自主性・主体性を培い判断力を身に付けさせる。

ただ、指導者の確保、事前の教員の準備等が難しいためか、自然学校の期間短縮により、子どもたちの興味・関心を重視した個人選択活動を取り入れる活動形態が少なくなったことは残念である。

表２　野外炊事の回数による割合　（%）

	０回	１回	２回	３回	合計
H 23	0.0	58.3	37.5	4.2	100.0
H 24	0.0	55.3	42.6	2.1	100.0

表２からは、野外炊事を２回実施した学校が、5.1％増えたことが分かる。同じことを２回させることで、子どもたちに失敗体験を生かし、前回の反省から準備や片付けを要領よく行わせている。じっくりと、子どもたちに考えさせる場を与えているのである。ある学校は、「自分たちで考え行動することで、自立心と責任感を養う」というねらいのもと、野外炊事において、教員や指導補助員は安全指導をするが、その他のことは出来る限り手出しをせず、子どもたちの頑張りを見届けることに徹していた。他校よりも、若干時間はかかったものの、子どもたち自身に自信をつけさせることとなり、２回の野外炊事以後の活動においても、自主的に取り組むことができた。

事前にカレーの作り方を調べ、しおりで手順を確認しながら作業を進める子どもたち

体験活動の大きなねらいは、体験の過程で、何かに気づき、感じ、自他を理解して自分自身の変容を促すことである。単に個人的に楽しむのではなく、人や周りの環境と接しながら活動を行うことにより、社会的な関わりを身に付けさせるなどの効果も期待されている。

自然学校では、様々な活動をただ体験するのではなく、教員が「自然学校で、どのような力をつけさせたいのか」という「ねらい」をもって関わることが大切であり、それを実現するように、子どもたちの活動を支援していくことが大切である。

自然学校をさらに充実したものにするために、指導者の考え方を以下のとおりまとめてみた。

① どのような子どもに育てたいと思っているかを考える　指導者が「思い」をもって活動に関わることで、子どもたちへの関わり方や、指導者同士の役割がおのずと見えてくる。

② 子どもたちにどのような体験の場を提供するかを考える　子どもたちは達成感があると、またチャレンジしようという意欲をもち、積極性が出てくる。

③ 子どもたちへの関わり方を考える　子どもたちの存在を認め、子どもたちにとってプラスとなる時間を提供することは、子どもたちに自信をもたせ、成長するきっかけとなる。

子どもたちに豊かな人間性、社会性、自主性などを育むために、自然体験活動や社会体験活動などの機会を設けることが重要であると言われている。小学校における自然学校では、自然や人、地域とのふれあいを通して、「命の大切さ」や「生きる喜び」を実感できる教育活動であるとも言える。

何よりも、指導者は、子どもたちの活動をそっと見届ける勇気を持つことが大切である。

南但馬自然学校調査・研究委員会から

南但馬自然学校では、平成23・24年度の２年間にわたり、「原体験度調査結果の分析と自然学校プログラムの検証」をテーマとして、自然学校で本校を利用した学校などの協力を得て調査・研究を進めてきた。以下、概略を報告する。（詳細は、「平成23・24年度研究紀要」を参照）

☆　分析部会の取組

１　児童と大人（教員・母親）の原体験度の比較

児童は、８つの原体験のうち、原体験が豊かであるのは、表のとおり、「石体験」のみであることが分かる。

その一方で、特に原体験がやや乏しいのは、「木体験」「水体験」「情感体験」という結果が得られた。

今年度は、大人（教員、母親）にも同様の調査を行い、以下のような結果が得られた。

児童と教員、母親の比較の結果、８つの原体験の総平均体験得点は、児童の1.10点に対して、教員は1.65点、母親は1.53点で、それぞれ教員が0.55点、母親が0.43点上回っている。また、８つの原体験の平均体験得点すべてにおいて、教員と母親が児童を上回っている。大人が児童より高い理由として、教員は「児童に指導する」という立場を目指す上での「野外活動への興味・関心の高さ」、母親は「生活体験の豊かさ」からであると考えられる。

表　児童の原体験度　　回答人数（児童全体：2713名〈男子：1154名・女子：1559名〉）

	8つの原体験																								総平均体験得点
	水体験			土体験			石体験			木体験			草体験			動物体験			火体験			情感体験			
番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
質問項目	海や川など水中にもぐったことがある	山のわき水を飲んだことがある	深さがひざぐらいの川をはだしで渡ったことがある	どろんこ遊びをしたことがある	土の上をはだしで歩いたことがある	土のにおいをかいだことがある	石を割ったことがある	石で地面に字や絵を描いたことがある	石遊びをしたことがある	木登りで、自分の身長以上の位置まで登ったことがある	生えている木や竹などの立木を切りたおしたことがある	野山で、木の実採りをしたことがある	花のみつを吸ったりなめたりしたことがある	タンポポなどの草花でくき笛や草笛を作ったことがある	バッタやセミ、ヨモギつみをしたことがある	海や川で魚とりをしたことがある	ミミズを指でつかんだことがある	水辺の生き物をつかまえたことがある	マッチやライター、チャッカマンなどを使わないで火おこしをしたことがある	木や竹などの燃える音をきいたことがある	日の出を見たことがある	一歩先の見えない暗やみを体験したことがある	流れ星を見たことがある		
項目別体験得点（点）	1.35	0.47	0.91	1.50	1.61	1.03	1.21	1.72	1.61	1.17	0.40	1.04	1.20	0.93	1.43	1.12	0.87	1.25	0.59	0.76	1.53	1.00	0.98	0.76	1.10
平　均体験得点（点）	0.91			1.38			1.51			0.87			1.19			1.08			0.96			0.91			1.10

＊１ 体験得点…子どもは、上記の質問事項について、「何度もある」「ある」「ない」の３段階を尺度とし、「何度もある」を２点、「ある」を１点、「ない」を０点とし、「原体験度」を数値化したもので、合計点を回答人数で割ることで算出している。
＊２ 総平均体験得点…８つの原体験すべての合計点を回答人数で割ることで算出している。

○網掛けの基準「原体験が豊かである」…1.50点以上、2.00点以内

２　児童の原体験度と生活態度の相関関係

児童の８つの原体験と５つの生活態度「忍耐力」「協調性」「積極性」「思いやり」「自然への興味・関心」における相関関係を調べてみた。その結果、児童全体および男女においてもいずれも相関関係が認められる。（ただし、「動物体験」と「協調性」、「石体験」と「協調性」についてのみ、統計的有意に相関を認めることができなかった）この結果から、８つの原体験は、児童の「自然への興味・関心」「積極性」「忍耐力」「思いやり」「協調性」を醸成するのに、非常に有効な体験であると考えられる。

以上の結果から、今の子どもたちは、大人に比べ、原体験が乏しいことが分かったとともに、８つの原体験は５つの生活態度を育むのに非常に有効であることが分かった。にもかかわらず、児童が日常生活において８つの原体験を体験することが難しくなってきている現状にあることから、本県の自然学校推進事業は、「児童に、８つの原体験を豊かに味わわせる場の一つとして有効なものである」ということが再確認できたのではないだろうか。

（文責　主任指導主事　山根　伸治）

☆　検証部会の取組

１　自然学校プログラムの原体験実施調査結果について

利用校の各原体験実施状況（図１）を見ると、野外炊事、キャンプファイヤーはどの利用校も必ず実施しているため、「火体験」は100％となる。「情感体験」については、朝来山での雲海登山や「天空の城」として全国的に有名な竹田城跡に登山する利用校が多いため実施率は高い。また、「木体験」についても、隠れ家づくり、木工クラフト等を実施する利用校が多く、高い実施率となっている。この原体験実施率が高いのは、本校及びその周辺環境を生かしたプログラムを編成して、自然学校を実施した結果であると言える。

自然学校プログラムにおける原体験時間実施率（図２）を見ると、「火体験」「情感体験」「木体験」以外は低く、全体としても44.9％で、自然学校期間中に原体験の分類に入る活動（原体験に類似している活動）があまり実施されていないことが分かる。このことは、平成21年度から自然学校の期間が短縮され、プログラム中の活動数が減り、全体的に時間のゆとりが減少していることが少なからず影響しているのではないかと考えられる。このことにより、多くの利用校の自然学校のねらいや目的に仲間づくりや集団生活の向上をめざす内容が挙げられるようになり、自然学校での自然体験がそのねらいを達成するための１つの手段として捉えられ、学級づくり、学年集団づくりがメインとなっているのではないかと推測される。

「動物体験」「土体験」「石体験」「草体験」の実施率が低いのは、本校で実施できる活動が利用校に十分に周知されていないのではないかと考えられる。しかし、プログラム上には現れていないが、野外炊事や各活動後の自由時間に校内の川でサワガニやイモリ、オタマジャクシ等の生き物と触れ合ったり、土いじりをしたり、石を集めて遊んだり、草花を摘んだりしながら遊ぶ児童が多くいることは注目すべき点である。

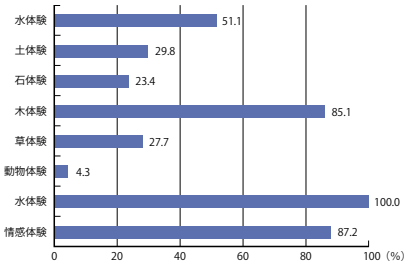


図１　利用校の各原体験実施状況

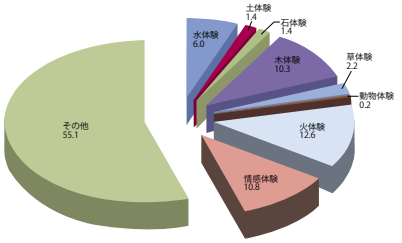


図２ 自然学校プログラムにおける原体験時間実施率（%）

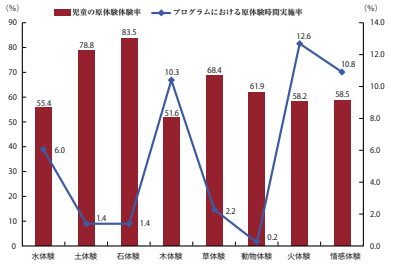


図３　児童の原体験体験率とプログラムにおける原体験時間実施率の比較

２　自然学校参加児童の原体験体験率の調査結果について

アンケートの原体験体験率とプログラムにおける原体験時間実施率の比較（図３）を見ると、アンケートで体験率の低い原体験の中でも、「木体験」51.6％、「火体験」58.2％、「情感体験」58.5％の３つの原体験は、自然学校プログラムでの時間実施率が全体として44.9％の中では比較的高く、「木体験」10.3％、「火体験」12.6％、「情感体験」10.8％となった。このことは、日常生活で体験の少ない「木体験」「火体験」「情感体験」が自然学校プログラムに多く取り入れられ、実施されていると言える。体験の少ない原体験を自然学校中に体験させたいという先生の思いが読み取れる。

（文責　主任指導主事　戸田　康夫）

（5）どんぐり

事後指導の充実について

兵庫県教育委員会は、平成 19 年度に自然学校評価検証委員会を開催し、自然学校の一層の充実を図るための「６つの方策」を示している。そして、その方策の１つとして「事前・事後の学習活動の一層の充実」を挙げている。

平成 24 年度、本校の自然学校実施（47 グループ 62 校）の自然学校実施後に提出された「実施活動報告書」をもとに、事後指導の実情とそこから見えてくる事後指導のよりよい在り方について考えてみたい。

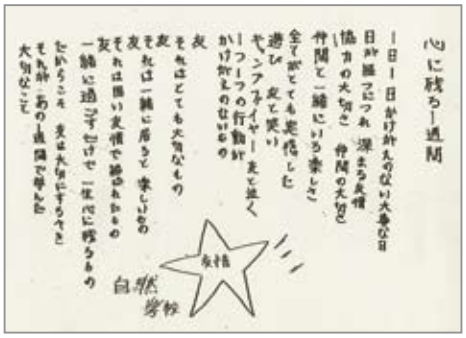
＊学校の授業等で、事後活動はどのように行われましたか（行う予定ですか）。（「実施活動報告書」の設問より抜粋）

	時間数											教科等												
時間数	1 時間	2 時間	3 時間	4 時間	5 時間	6 時間	7 時間	8 時間	9 時間	10 時間	10 時間以上	国語	社会	算数	理科	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動
グループ数	1	4	9	6	5	7	2	3	1	6	3	14	0	0	1	0	5	0	0	0	0	44	2
（%）	2.1	8.5	19.1	12.8	10.6	14.9	4.3	6.4	2.1	12.8	6.4	29.8	0.0	0.0	2.1	0.0	10.6	0.0	0.0	0.0	0.0	93.6	4.3

＊ 47 グループ（62 校）　　＊教科等複数回答有り

上記の結果より、事後指導時間数でもっとも多いのが３時間で、以下、６、４、10、５時間の順となっている。また、グループによっては、事後指導に 20 時間もかけているところもあった。

また、事後指導を実施する教科等でもっとも多いのが、「総合的な学習の時間」で、実施率が 93．6％とほとんどすべての学校において実施され、次に多いのが国語、図画工作という順になっている。内容については「新聞づくり」「パンフレット・文集づくり」「活動報告書づくり」「発表会・報告会」「俳句・短歌・詩づくり」などの他に、「絵巻づくり」「自然学校の活動の様子の絵画」などの取組も数グループ見られた。



詩・・・自然学校を振り返る中で、友だちの大切さを、体言止め、反復法等の技法を用い、しみじみと表現している。

（宝塚市立西山小学校）

・　朝来山　きれいな雲海　ごほうびだ
・　星空の　まぼろしの星　ながれ星
・　山登り　つかれた先に　絶景が

俳句・・・自然学校での登山で雲海を見たこと、星空観察で流れ星を見たことの感動を、「雲海」「ながれ星」等の季語を交え、五七五調で素直に表現している。

（明石市立魚住小学校）

一番多く行われていた事後指導の内容としては、16 グループが実施した「新聞づくり」であった。各校、様々なテーマで創意工夫を行っているが、ここでは明石市立谷八木小学校の「新聞づくり」を紹介する。右記のとおり、すべての子どもが１人で「自然編」「仲間編」「自分編」の３枚の新聞を作成している。自然学校の３つの大きなねらいの中の「自然とのふれあい」「人（自分・仲間）とのふれあい」に焦点をあてている。

また、「自然学校」での「感動体験」を、「俳句」として表現させた明石市立魚住小学校、「詩」として表現させた宝塚市立西山小学校の子どもたちの作品の一部をそれぞれ紹介する。

新聞・・・ここで紹介するのは、子どもが作成した３枚のうちの１枚、「自然編」である。ナイトハイクを通じて、昼の自然と夜の自然の違いを体感しているとともに、「流れ星を見たこと」の感動が伝わってくる。また、「自分編」においては、普段あまり感じることのなかった家族への感謝を、「仲間編」では、野外炊事やスタンツなどで失敗や仲間同士の葛藤をのりこえて、成功した喜びを表現するなど、一人一人がそれぞれテーマを絞った３種類の新聞に、生き生きと思いを表現している。

（明石市立谷八木小学校）

小学校において新学習指導要領が全面実施となり、２年が経過しようとしているが、指導要領の改訂の１つとして、「言語活動の充実」が挙げられる。また、国語科学習指導要領〔第５学年及び第６学年〕の「内容」の「B 書くこと」において、書くことの能力を育てるために、「経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること」などの言語活動を通して指導するものと明記されている。

「言語活動の充実」のためには、その表現方法を磨くのはもちろんであるが、子どもたちが「表現したい」という意欲を持つ前提として、「感動体験」が必要となる。本県の推進している自然学校において、子どもたちが、「感動体験」を味わい、その体験で感じたことの表現の場として、新聞、詩、俳句などをうまく活用することで、「言語活動の充実」を図ることができると考える。

今後も、自然学校における「感動体験」をもとにした、「言語活動の充実」に向けた事後指導がより一層図られることを期待したい。

（文責　主任指導主事　山根　伸治）

(2) 指導者の共通理解の大切さ

食堂で体調が気になる子どもの様子を確認したり、食物アレルギーの代替食を子どもとともに確認したりしている指導者、常備薬の服用を確認している帯同救急員等、指導者間で連携をとりながら健康管理に当たっている様子が見られた。その連携に至るまでには、事前の健康調査を含め保護者との打ち合わせも必要である。この事前準備と指導者の共通理解が、子どもと保護者に安心感をもたせ、子どもの落ち着いた行動につながる。また、自然学校実施期間中は、天候や子どもの体調により、急遽プログラム変更をするなど、臨機応変に判断していくこともある。そのような時、子どもの健康状態の共通理解がないと、大きなけがの発生につながることもある。実施期間中は、引率教員が交代していくため、指導者間で共通理解をしていくことが、とても大切になる。

(3) 安全指導の在り方

医療機関を受診したけがの発生を見ると、“火や包丁を使う野外炊事”“いろいろな工具を使うクラフト”“丸太を使う隠れ家づくり”などの活動よりも、自由時間に起きているケースが目立っており、骨折や歯のけが等が発生している。各活動については、指導者へ事前説明会で「ヒヤリハット体験」を基に作成した安全指導チェックシートを紹介し続け、安全への意識が高くなったことや本校職員が各活動前ＯＲを実施していることもあり、受診を要するようなけがの発生が抑えられていると推測される。その反面、自由時間や活動と活動の合間にできた時間のゆとりでの安全指導はどうだろう。子どもたちは、自由時間と聞くと、緊張感がゆるむことや初めての場所で危険予知がしにくいこともある。事前の子どもたちへの声かけ一つでも、危険予知の気づきとなる。自由時間をどのようなスタンスで指導し、事故の発生を防ぐか考えていく必要がある。

子どもたちが、自然学校を健康で安全に過ごし、様々な体験をしていく中で、生きる力を身に付け、その後の大きな成長につながっていくことを願っている。　（文責　指導主事　藤井陽子）

「アフター自然学校」紹介

稲刈りと朝来山登山　～加古川市立陵北小学校の取組より～

本校において、「自然学校の事業実施 20 年経過による様々な教育効果や環境体験事業の全校実施等を踏まえ、各校の創意工夫を生かした効果的な体験活動の展開を支援するため、自然学校の事前・事後体験活動の充実を図る」という目的で、「プレ自然学校・アフター自然学校」を実施している。

今年度、「アフター自然学校」を実施した加古川市立陵北小学校の取組について紹介する。

平成 24 年 10 月５日（金）、陵北小学校は、「アフター自然学校」として与布土地域自治協議会の方々との稲刈りを通した交流活動と朝来山登山を実施した。同校は、平成 24 年５月 14 日（月）から 18 日（金）までの４泊５日間、本校において自然学校を行い、その期間に与布土地域自治協議会の方々の協力を得て、田植えを実施した。また、当初は全員で挑戦するはずだった朝来山登山も、雨天のために２日目から５日目に期日変更しただけでなく、選択プログラムとして希望者だけが朝来山雲海展望台まで往復するミニ登山となった。

そのこともあって、陵北小学校は「アフター自然学校」として、当初予定していた稲刈りに加えて、朝来山登山も計画した。当日は、好天にも恵まれ、与布土地域自治協議会の方々と稲刈りを通した交流を行ったとともに、全員が朝来山登山を元気に行うことができた。

初めての稲刈り

五月の自然学校で植えた苗が稲になって、それを刈ります。
私は、稲刈りは初体験でちょっとカマで切ったりするのはこわかったけど、やってみたらすごく楽しかったです。
刈った稲を、ワラで結んで、それを開いて、のっけるのは、初めて見ました。

（子どもの感想より抜粋）

今回の取組は、実施校が当初の計画段階から「自然学校」と「アフター自然学校」を合わせることで、５月の自然学校で田植えを行い、10 月に生長した稲を刈るという一貫した取組であった。子どもにとっても、米作りや登山において、初夏と秋の自然の違いを体感できたことは印象的だったようだ。

今後も、利用校において計画段階から、１学期利用校は、２学期に「アフター自然学校」を、また２学期利用校は、１学期に「プレ自然学校」を行うことで、季節により表情の変わる自然の姿を子どもたちに体感させることをお勧めしたい。　（文責　主任指導主事　山根伸治）

自然学校における健康管理について

～平成24年度南但馬自然学校傷病発生状況から見えてくること～

自然学校のねらいを達成させ、より充実したものにするためには、子どもが健康で元気に過ごすことが基本となり、指導者の健康管理や安全管理の在り方が鍵となる。平成24年度の傷病発生状況をまとめ、今後の指導の在り方について振り返ってみたい。

1　傷病記録から

(1)　傷病発生状況と医療機関受診状況（表１参照）

傷病発生率は、昨年度と比べて、内科では、0.9%から1.1%に増え、外科は、昨年度と同じで1.0%である。19年間の平均発生率と比べると、内科、外科ともに増加している。

医療機関への受診率は、昨年度と比べると、内科で受診率が増加している。

表１ 傷病発生状況及び医療機関受診状況

	医務室処置			受　診		
	内科	外科	合計	内科	外科	合計
H 24 年度発生件数（件）	209	195	404	29	21	50
H 24 年度発生率（%）	1.1	1.0	2.1	0.2	0.1	0.3
H 23 年度発生率（%）	0.9	1.0	1.9	0.1	0.1	0.2
19 年間の平均発生率（%）	0.9	0.8	1.7	0.1	0.1	0.2

※発生率・受診率は、件数を利用延べ人数19,248人で割り算出した。
※受診件数は医務室処置件数に含まれている

(2)　傷病発生状況の内訳（図１・２参照）

内科の内訳では、多くが「発熱・感冒」「頭痛」「疲労倦怠感・気分不良」で、その中で学校感染症と診断されるケースがあった。

外科の内訳では、多くが「切り傷・擦過傷・刺傷」「打撲」「虫ささされ」で、それ以外に骨折事例が発生している。

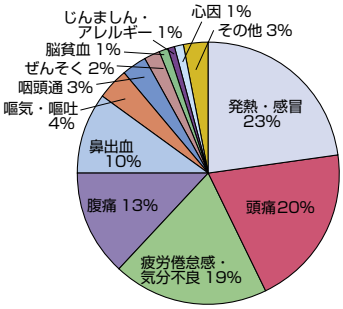


図１　内科の内訳

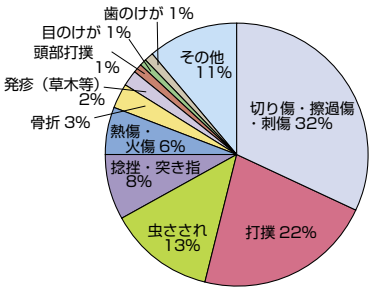


図２　外科の内訳

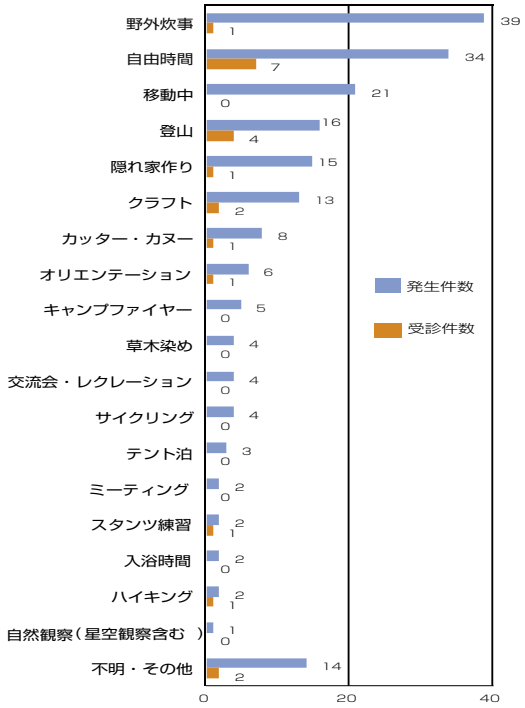


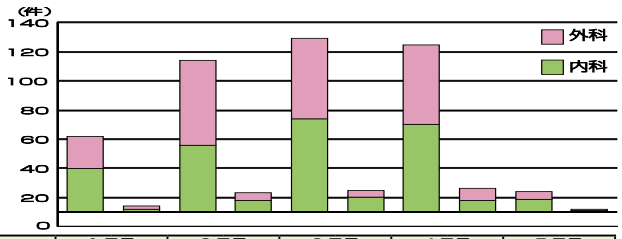
図３　活動別けがの発生条件・受診件数

(3)　活動別けがの発生件数・受診件数（図３参照）

活動別けがの発生件数では、多くが「野外炊事」と「自由時間」に発生している。その中で、受診件数を見ると発生件数の多い「自由時間」と「登山」に受診したケースが多く見られる。

(4)　日別傷病発生件数・受診件数（図４参照）

日別傷病発生件数は、３日目、４日目の順で多く見られ、内科は３日目に、外科は２日目に多く発生している。受診件数では、内科が３日目、外科が４日目に多く発生している。



	1日目		2日目		3日目		4日目		5日目	
	傷病	受診	傷病	受診	傷病	受診	傷病	受診	傷病	受診
外科	22	2	58	5	55	5	55	8	5	1
内科	30	2	46	8	64	10	60	8	9	1

図４　日別傷病発生件数・受診件数

2　健康・安全管理面から見えてきたこと

この１年間を振り返り、子どもの健康・安全管理の指導ポイントとして、下記の３つが挙げられる。

(1)　健康観察の重要性

傷病発生件数は、特に内科で増加している。これは、子どもが初めての体験活動からくる不安感から早めに症状を訴えることもあるが、日々の健康観察を丁寧に行い早めに対応していることが、理由の一つに挙げられる。この丁寧な健康観察は、個々の健康状態に合わせた活動につながり、より安全に活動できることになる。普段の生活環境とは違うため、天候の不順や気温の寒暖差も負担になることも考えられる。今年度、子どもの疲労度にあわせ、活動時間の開始を遅らせたり活動時間を短縮したりして、プログラムの内容を検討された利用校もある。丁寧に健康観察を行い、その結果をその後のプログラムに生かしていくことが重要になってくる。

平成２５年度　講座・研修会のご案内

自然体験活動一日講座

目　　的：様々な自然体験活動に係る技術や指導法について研修し、指導力の向上を目指します。
対　　象：公立小・中学校（神戸市を除く）及び特別支援学校教員（初任者研修及び 10 年経験者研修の校外研修としても受講可）
　　公立高等学校（神戸市を除く）教員（10 年経験者研修の校外研修としても受講可）
募集定員：各回 40 名程度

回	期　　日	内　　容
第１回	平成 25 年　6 月 25 日（火）	実習「自然に親しむ」（自然に親しむゲーム・遊びの指導）
第２回	平成 25 年 10 月　8 日（火）	実習・演習「自然を感じる」（自然を感じるアクティビティの指導・開発）
第３回	平成 25 年 11 月 26 日（火）	実習「自然物でつくる」（草木染め・自然物でつくるクラフトの指導）

自然とのふれあいゲーム

自然学校出前講座

目　　的:本校の職員が要請に応じて県下各学校等を訪問し、自然学校等「生きる力を育む体験活動」の支援を行います。
実施期間：平成 25 年４月～平成 26 年３月（実施日は各学校の要請をもとに調整します）
内　　容：〇自然学校に関すること
　・自然学校の趣旨説明・事前相談・事前学習・事後学習・事後相談・保護者説明会（原則、本校を初めて利用する学校のみとする）
　※出前授業として、兵庫県立南但馬自然学校で展開されるアクティビティの一部も行うことができます。（ロープワーク実習、火おこし体験、一人テント設営、野外炊事実習等）
　〇プログラムデザインに関すること　　〇その他
申込方法：実施日の１ヶ月前までに「自然学校出前講座申請書」で申し込んでください。

自然学校講座（指導者入門）

目　　的：自然学校の趣旨や指導者の役割を理解するとともに、野外体験活動等の実習を通して、指導者としての資質向上を高めます。
期　　日：平成 25 年８月 27 日（火）～ 29 日（木）１日または講座単位の受講も可
対　　象：大学生、一般県民、県下の公立学校教員（高等学校初任者研修及び 10 年研修として受講可）、自然学校に関心のある者
募集定員：30 名
内　　容：自然のお話・自然観察、活動におけるリスクマネジメント、キャンプファイヤー指導の基礎基本、アクティビティ体験（立木〈竹・ひのき〉伐採実習）、クラフト（竹・木工）指導の基礎基本、野外炊事指導の基礎基本　等
参 加 費：食事代、宿泊料、リネン料、保険料、活動材料費

プレ自然学校・アフター自然学校

目　　的：創意工夫を生かした体験活動の展開を支援、自然学校の事前・事後活動の充実を図ります。
期　　日：日帰り又は１泊２日
　⑴自然学校受入期間中　金曜日・土曜日受け入れ可（金曜日から土曜日にかけての１泊２日も可）
　⑵自然学校受入期間以外　いつでも受け入れ可
対　　象：県内公立小中学校
内　　容：施設散策オリエンテーリング、朝来山登山、自然体感ゲーム、クラフト、野外炊事、隠れ家づくり、テント泊等
経　　費：食事代（弁当持参も可）、施設使用料、活動材料費

親子で自然学校　　～親子で南但馬自然学校を楽しもう～

NEW
第１回　平成 25 年　８月 24 日（土）～ 25 日（日）
第２回　平成 25 年 12 月 21 日（土）～ 22 日（日）
第３回　平成 26 年　１月 18 日（土）～ 19 日（日）
第４回　平成 26 年　３月　８日（土）～　９日（日）
参 加 費：食事代、宿泊料、リネン料、保険料、活動材料費
対　　象：原則として県内の小学生とその保護者
　※原則１泊２日ですが、日帰り希望も受け付けます。
募集定員：10 組（40 名程度）
内　　容：自然物遊び、キャンプファイヤー、朝来山登山、自然物クラフト、星空観察、クッキング（カレー・クリスマスケーキ）等
申 込 み：事前に参加申込が必要です。各回の実施日１０日前までにお送りください。

雪遊び

遊友体験事業　（里山遊友（ゆうゆう）体験）

NEW
第１回　平成 25 年　４月 27 日（土）9：30 ～
　「見つけよう！食べよう！いろいろな山菜」～森の山菜さがし～
第２回　平成 25 年　７月 13 日（土）9：30 ～
　「見つけよう！さわろう！いろいろな生き物！」～森の生き物さがし～
第３回　平成 25 年 10 月 26 日（土）9：30 ～
　「見つけよう！調べよう！いろいろなきのこ」～森のきのこさがし～
参 加 費：保険料
対　　象：一般県民（子どもだけの参加はご遠慮ください）
申 込 み：事前に参加申込が必要です。各回実施日の５日前までにお送りください。

専門家によるきのこの解説

※詳しくは、兵庫県立南但馬自然学校指導課までお問い合わせください。

南但馬自然学校だより「どんぐり」№61　●平成 25 年３月　●兵庫県立南但馬自然学校発行
●〒 669-5134 兵庫県朝来市山東町迫間字原 189　● TEL(079)676-4730　● FAX(079)676-4008
● URL　http://www.shizengakko.jp/　● E-mail　mtajimashizen@pref.hyogo.lg.jp
PRINTED WITH SOY INK
植物油のみ使用した、環境にやさしいインキです
24 教Ⓟ2-047A4